



微
譜
又
原

二

止



晴々
明明德
竹乃中
首風

江先の念
首風

積さ心量哉

俳諧文藻卷之下

文章堂藏
貸不禁止賣

目錄

- 一 瓢銘
- 一 扇歌
- 一 大根頌
- 一 未韻短歌行
- 一 雙六行
- 一 笠賦
- 一 極樂寺教 并發句
- 一 七夕姫之和讚
- 一 雪見賦
- 一 連俳歌仙行
- 一 月見賦
- 一 幻住菴記

一象纂賦

以上

俳諧文藻卷之下

瓢銘

天章水

世間小庚申の夜を清くもろくもろく
 視聽言動三戒あり三疋の猿を養ふるなり
 見ざる能ざる言ざるの為あるよしと水々
 中々の口を以て禱の所也北の魯の廟守
 此口を以て能くもろくもろく言を
 清くもろくもろく孔子のまじりきり

近くは言はれ聯といふものありしは遠き
林を風とよみおきあはれいよあはれ
手ひそふ三戒をあらわす年と月を
時の戒とて淫声美色の戒とて老ぬ
お夕ふうむいむをいふまはく
たふくく老ぬくも細くおぬく
も後とて継ぎつめて地ゆきあ
たぬとて志ふき後のおぬく
おぬきをわづらひの道徳をいふ
いと社名のおぬきの言を端とて老後の戒とい
あはれあり

銘曰

舞よ〜海の日もきつ年のおぬくと繋而不
食やといふ自傍のさしあはれぬれけ
也の名よあはれも老ていふをいふ
舞よ〜おぬき舞の言あはれおぬきの思
子実をいふ言も能くあはれ舞よ
浮きおぬき舞よといふ言の用あり

歌よ〜許由の唱をわらふも空や
唱をせしむ〜の轉愈う友とら
送るも〜お母さまのそ不平おれ
春のるも〜秋のせ〜もあけ神宮をぬく
よ〜たる巨石の大うあ〜もみき千生の小サ
〜もよ〜り驚くも〜も〜の法燈をよま
さし〜

極樂寺教 并發句

是佛坊

知事とけ〜是佛坊うけありぬ〜
流轉中極樂と〜教あり〜意の事忘の
業心をあ〜大純子おひり月子か〜
深燒の風味を求れ〜山麓のふけの鼻お
〜と〜を〜を〜所〜を〜院佛と〜
ある〜を〜を〜の〜たる〜ある〜
遠るもか〜〜
法と〜を〜
の律お〜

そのまゝに物もあつた。その名を松葉の
仁平といふ。一蓮托生の世をうけて
蓮の中を東苑坊をまぐる。そのまゝ人々
捨りた陰夜あつた。故に優婆塞も優婆塞も
一紙も残れぬ。行燈をとり
之、現世を吹く。四壁も四季の花鳥を
見す。法の佛一音も。天竺の夜叉
も腹を皮をよむ。今時在佛坊もくも
起る。のりく。象の佛燈を立す。念佛中

年暮もく。瀧小瀬師の綱をかせ。小瀬を
あつとせ。小瀬——湯屋のあの柳地陰も
涼——之東縁も。ありく。小瀬を
この寺の東地も。果敢東苑の松葉の
あつと。東苑坊曰あつと。家——
新居。出雲家。名を流結。その名を
多利也。名す。足小の世。果の神。その名を
瀧の瀧。その名を。松葉の松葉。その名を
あつと。その名を。松葉の松葉。その名を

この世の衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を
もつ故の衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を
信を衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を
以て衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を
御法衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を
おのれ衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を
和合の心はすくなく世の衆一まの心父母を
体相を衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を

四季花鳥

梅

芝佛坊

梅は身とくちうの心はすくなく世の衆一まの心父母を

雪

貫仙

うらみ寸也此衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を

梅

佐巴

七夜衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を

雪

左明

衆の心はすくなく世の衆一まの心父母を

梅

盤泉

きんちのれは 掃きくさし 起佛

蝙蝠

許丹

かひわりや ありあそし 秋陰天并

桂花

石人

ありかきや 幸とくく 秋陰天并

雁

胡伴

清くく 存れたよりや すまし計

斥鴳

六極

みそきぬきを 花より 十万里

雪花

過角

うしうし 浮陀の毛物や 夏の毛

天人

陸夜

極楽を 羽帯着て 蝶もあし

扇歌

東花坊

とくし 扇の音を 吾もあはて 木曾寺

此旧並小扇を その影の友ありく 泉行ふ

おん——しよは扇のりまのちのし籍の
ひろの世を——と流舞の佳のひろくま
らそいおるおろちをきしとら也

ともく舞の人のあまふあつくその名を
うしみしああそふさよこの舞のあをたか
し(也)

ともく扇の人のあまふとてあまふ——あ
らむこのあまのあまふとてあまふらつた

ともく舞の人のあまふとてあまふ——あ
らむこのあまのあまふとてあまふらつた

ともく舞の人のあまふとてあまふ——あ
らむこのあまのあまふとてあまふらつた

ともく舞の人のあまふとてあまふ——あ
らむこのあまのあまふとてあまふらつた

月とくひのほのぼのの火燈の小葉のあはれ
友をとまゝ——人のあはれをさるる舞の袖の
より背中をかくせし葉のあはれより
華をまゝのさるる——人のあはれをさるる
あはれの袖より度をとまりしあはれのさるる
うねりとあはれよりあはれのさるるあはれより
あはれのさるる——人のあはれをさるるあはれより
父母をうねる——人のあはれをさるるあはれより
せううあはれをさるるあはれをさるるあはれより

あはれ——人のあはれをさるるあはれより
きよはすのあはれをさるるあはれより
夜のさるる小舟のあはれをさるるあはれより
真由をさるるあはれをさるるあはれより
平白漫地のさるるあはれをさるるあはれより
うねる——人のあはれをさるるあはれより
星出のさるるあはれをさるるあはれより
孺子のあはれをさるるあはれをさるるあはれより
あはれをさるるあはれをさるるあはれより

名少死也月の影を照らす草花
石白子の白のあはる 薨入
うゝ薨子と水鏡の影を照らす
うゝ番申しと水鏡の影を照らす
通申しと水鏡の影を照らす
け刃の鞆ハリ川を伝ふ
年またに老後の年を謝す
薨子の薨の影を照らす
お膳子薨六ハあはる入

珍 由 純 二 珍 由 純 二 珍 由 純 二 珍 由 純 二

名少死也月の影を照らす草花
石白子の白のあはる 薨入
うゝ薨子と水鏡の影を照らす
うゝ番申しと水鏡の影を照らす
通申しと水鏡の影を照らす
け刃の鞆ハリ川を伝ふ
年またに老後の年を謝す
薨子の薨の影を照らす
お膳子薨六ハあはる入

珍 由 純 二 珍 由 純 二 珍 由 純 二 珍 由 純 二 珍 由 純 二

をらるるくくたさくわいふもかゝる寂を
あつし山舞の詠をわくたつとみ書あつし
病身の人なうして世をいふくく人か知あり
何とて法をたげせは悟をよめあつし
名はあつしあつしあつしあつしあつしあつし
生涯のたうくくあつしあつしあつしあつし
はあつしあつし無能無才を初るのこりあつし
あつしあつし魂つとく眉を志あつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし

象碁賦

東苑坊

象碁の蠶觸のあつしあつしあつし
吾朝の象碁とあつしあつしあつしあつしあつし
盤の上の象碁をあつしあつしあつしあつしあつし
象碁の忠臣の義をあつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし

船組の法とありてなる本所橋あり金銀桂香
を八まゝとせしむる飛車と角行とを軍師の位
ありし一むしき漢は張良あり蜀あり
孔明ありしと凡諸軍ハすしとてそのよしと
ふはといふとありし一むしき銀符とありて
ありしと敵の城中にありしむしき直し一官を
して金符とありしむしきを象鼻の勸賞と
ししことありし歩兵と楯の羽をありしむし
きとす免を法ぬるとその法は敵陣をさるる
飛車ハよく番車を法ぬる角行ハよく桂馬
を法ぬることありしむしきを油麻とありて
旗の旁にありしむしきとて飛車ハ居飛車
ありし間飛車ありし中飛車ハ古法の軍
ありし中央に銀角行のありしむしきを
一兵の換ありし兵書を法ぬる免方の軍法
ありしむしきをありしむしきを法ぬる
ありしむしき中飛車ありしむしきを
歩兵のありしむしきを法ぬる先ハ軍林の血

ありしむしきを法ぬる先ハ軍林の血

爲子と横より水を渡りて小舟より水に
銀桂の道をたゞしむる所とて
度せうとありて水を武勢の大將と爲りて
敵を楯の形を叩て敵の味方の大将を
討せしと馬は是れ志とありて
征軍のありてありて千鈞の弩の
龍鼠の爲りてありて兵書の軍の
家ありてありてありて王の侯を
ありてありてありて梅馬をありてあり
銀をか拵より金をうたげて梅馬の陣を
攻めたりて鉄石志強も防りてありてあり
是を龍王の平押とありて飛軍は家あり
軍徳ありてありて家の香車ありてあり
彼よりありてありて命をたゞしむる
是れの名符ありてありて小冠志ありてあり
ありてありてありてありて成歩歌あり
ありてありて小歌をありてありてありて謂
して角行ありてありて千里のありてあり

亂よりいふ所よりうら 石田とてなる 駒龍子 香車
道子 牙をさくく ちんくハ 金銀と引能て
飛車 の 為 命 を お しま 且 死 持 の 常 乘
を ちんく ちんく の 仲 違 の 意 ちんく ちんく
或ハ 飛 龍 王 の 敵 城 を 破 る ちんく の 擲 ちんく
落 ち け ちんく 敵 を ちんく ちんく 王 城 の
備 の ちんく ちんく 銀 を ちんく 楯 を ちんく ちんく
あ の ちんく 踏 踏 意 の 透 意 を ちんく ちんく ちんく
王 子 飛 車 ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく
ちんく 角 行 の 象 の 秘 法 ちんく ちんく ちんく ちんく
ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく
角 行 と ちんく ちんく の 自 他 の ちんく ちんく ちんく
ちんく ちんく 連 奇 城 階 の 兵 隊 ちんく ちんく ちんく
陣 中 の 兵 隊 ちんく 陣 中 の 兵 隊 ちんく ちんく
ハ 陣 中 の 兵 隊 ちんく 陣 中 の 兵 隊 ちんく ちんく
いふ 角 行 ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく ちんく

まつりいそや盤上のあそびを足てあそびの
 貴賤をもとくその心は利鈍をも知る
 是も久しきよき子との道は師をえりて
 まつりハ野盤の法をえりて

貞吉

ちかきうめくけさうやめせこの世は
 まつりいそや盤上のあそびを足てあそびの
 貴賤をもとくその心は利鈍をも知る
 是も久しきよき子との道は師をえりて
 まつりハ野盤の法をえりて

中上は行何ぞ松居少一
 義範仙女香月松の年
 速ひのきの行ひと
 ちかきうめくけさうやめせこの世は
 まつりいそや盤上のあそびを足てあそびの
 貴賤をもとくその心は利鈍をも知る
 是も久しきよき子との道は師をえりて
 まつりハ野盤の法をえりて



貞吉弘書林名古屋

賣弘書林名古屋
 文華堂
 敬白
 亀蜚園

